

シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕

～デカルトの独自の用法とその認識論～

村 上 吉 男

シモーヌ・ヴェーユが質すデカルト認識論には、いわゆる《真理の探求》での認識論⁽⁵⁸⁾があると語られるは当然、前回の〈日常的用法〉⁽⁵⁹⁾の認識論と、さらに筆者が命名し、今回確認するところの「もう一つの真理の探求」の認識論もあることが、彼女の次なる引用文にて明らかにされよう。それは彼女の学士論文『デカルトにおける科学と知覚』中の既出引用文⑩⁽⁶⁰⁾のすぐあとに続き、第一部が終わるまでの長い引用文にある（引用文と筆者訳がかなりな行に達するため、適当な文章を区切りにして、数字番号をこれに付しておいた）。

Ⓔ ① Il (Descartes) a averti lui-même ses lecteurs qu'ils n'y trouveraient pas autre chose s'ils ne faisaient que chercher à savoir son opinion sur tel ou tel sujet, le considérant du dehors et par fragments. ② La pensée cartésienne n'est pas telle qu'on puisse la commenter du dehors; ③ tout commentateur doit se faire au moins pour un moment cartésien. ④ Mais comment être cartésien? ⑤ Être cartésien, c'est douter de tout, puis tout examiner par ordre, sans croire à rien qu'en sa propre pensée, dans la mesure où elle est claire et distincte, et sans accorder le plus petit crédit à l'autorité de qui que ce soit, et non pas même de Descartes.

⑥ Ne nous faisons donc aucun scrupule d'imiter, en commentant Descartes, la ruse cartésienne. ⑦ Comme Descartes, pour former des idées justes au sujet du monde où nous vivons, a imaginé un autre monde, qui commencerait par une sorte de chaos, et où tout se réglerait par figure et mouvement, de même imaginons un autre Descartes, un Descartes ressuscité. ⑧ Ce nouveau Descartes n'aurait du premier ni le génie, ni les connaissances mathématiques et physiques, ni la force du style; ⑨ il n'aurait en commun avec lui que d'être un être humain, et d'avoir résolu de ne croire qu'en soi. ⑩ Selon la doctrine cartésienne, cela suffit. ⑪ Si Descartes ne s'est pas

trompé, une réflexion semblable à partir du doute absolu doit, pourvu qu'elle soit librement conduite, coïncider au fond, en dépit de toutes les différences et même de toutes les oppositions apparentes, avec la doctrine cartésienne. ⑫ Écoutons donc ce penseur fictif. ⁽⁶¹⁾

①デカルトは自ら読者たちに（次のような）注意を与えた。（すなわち、）もし読者たちが自分（デカルト）を外から、かつ断片的に考察して、これこれの事柄に関する自分の見方を知るよう励むだけならば、読者たちは不明瞭、難点、矛盾以外の事柄を見出すことはないであろうと。

②デカルトの思惟は外から注釈され得る思惟ではない。

③いかなる注釈者もせめてしばし、デカルトを自称すべきである。

④だがいかにすれば、デカルトになり切れるのか。

⑤デカルト的であることは、すべてを疑うことであり、次いで自分自身の思惟が明瞭で判明であるかぎり、その思惟のほかには何も信じることなしに、またたとえ何人であれ、デカルトであれ、（彼らの）各権威をまったく信頼することなしに、すべてを秩序立てて吟味することである。

⑥だからデカルトを注釈するとき、わたしたちはこのデカルトラしき巧みな企てをまねることを少しもためらってはならない。

⑦（それでも）デカルトがわたしたちの生きている世界の事柄への正しい考えを抱くにあって、混沌のようなものから始まり、すべてが表象と運動によって調節される、別の（事柄の）世界をまさに想像した（のだから）、（それと）同様に、わたしたちはもう一人別のデカルト（がいること）を、生き返ったデカルトを想像することにしよう。

⑧この新しいデカルトは（しかし）、天分も、数学的物理学的知识も、文体の力もはじめから有しはしないであろう。

⑨（というのは）新しいデカルトは、人間的存在であることと、自分自身だけを信じようと決心したこととを共有するであろう（から）。

⑩デカルト説に従えば、これで十分である（デカルト説は以上で足りる）。

⑪デカルトの思い違いでないにしろ、絶対的懐疑に基づく同様な見解は、それが自由に導かれさえすれば、すべての相違とすべての明白な対立にもかかわらず、結局デカルト説に合わさるにちがいない。

⑫ そうだとすれば、こうした理想を夢見続けていたい思想家に耳を傾けないではいられぬであろう。(括弧内は筆者)

筆者が引用文⑤の①から⑫の各文章を、本稿冒頭箇所にしおいた用法に振り分けてみると、次の通りになろう。すなわち⑤は〈真理の探求〉を、⑦(前半の「別の(事柄の)世界をまさに想像した(のだから)」まで)は〈日常的用法〉を、⑦(後半の「(それと)同様に」以降)や⑧と⑨(また⑪も含めてよい)は「もう一つの真理の探求」を示唆させるということである。

ところで、数回にわたる「シモーヌ・ヴェーユとデカルト」は、シモーヌ・ヴェーユという現代の女性哲学者が「デカルトにおける科学と知覚」に書き残し、そこに筆者が学び得たデカルトの諸思想のうちの認識論的思想をば、今度は筆者がデカルトに質さんとしてきた拙論であるし、いまだ継続中である。しかも筆者は、彼女の上記した作品からのフランス語文ばかりか、彼の、ラテン語でなしに、フランス語による引用文を筆者訳を添えて多用するほか、とりわけ彼の引用文を、単一作品に記される内容順または全作品刊行の年代順にとられず、筆者の論述に従わせるにすぎなかったのである。

デカルトの引用文を多用する事由は以下にある。筆者のねらいである「デカルト認識論」は、彼が三つの用法の各認識論を諸作品のみか、全作品のなかで散見させ、また関係させるごとくに成り立たすところに見出せるのだから、筆者は「筆者の論述」に適當する引用文を、単一作品に記される内容順または全作品刊行の年代順に執着せずに、いかなる作品からでも随時抽出し得るとの判断に立ち得るからである。

三つの認識論が関係するとは、これをして、デカルトが全作品で、各個別での認識論を、それゆえ彼の諸思想に与し、三つを加えていう「デカルト認識論」を整合させ得るようまとめ上げていたことを示す一方、ある用法の認識論が機軸となって、他のおのおのとかかわりを保たせていたことをさす。ある用法の認識論はもとより、〈日常的用法〉の認識論である。筆者はだから、彼がこの認識論を要にして、〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」の各認識論を打ち立てたと読む。別言すると〈日常的用法〉に関係しなくなる用法が〈真理の探求〉、〈日常的用法〉に関係している用法が「もう一つの真理の探求」になると

いうことである。「関係しなくなる」と「関係している」はいずれも、こうした意味での「かかわり」をあらわす以上、そう記すほかにないのである。

筆者は認識論をみるに欠かせない能力を例に、今一度前段までのことを確かめておく。なぜなら筆者の「デカルト認識論」のよって立つ立場を物語るは、前段までのことを能力の語句をもって繰返されるが妥当だからである。デカルトは全作品のいずれに対しても、およそある用法の認識論と銘打ち提示したり、各用法の認識論を一堂に会したりすることはない。そのうえ、三つの用法の各認識論はそれとしての能力を有するのに、筆者がどの作品を一見するにしろ、能力はある用法の能力だけに用いられるのか、他の用法の能力として兼用され得るか、彼は作品にその断わりを入れたいし、何らの名ざしもない。だからこそ筆者は、彼が能力を三つの用法に起用しようとするうへは、能力を細心の注意を払いながら、かつ思うがままにある用法や他の用法の能力に使用してよいと断じるわけである。

またデカルトには、ある作品中に記されるある用法の能力を、他の作品で繰返したり、ほぼ同意の語句に言い換えたりすることがしばしば見受けられる。そのためか、筆者は㊦㊧の語句をかりて表現し得るように、能力は複数の作品に「巧妙」に仕組まれちりばめられると指摘できる。こうして、複数の作品あるいは全作品を参照せねばならぬ意図は、結局能力の書き込まれる引用文が「いかなる作品からでも随時抽出し得る」ことを可能にさせ、もって「筆者の論述」に供せられる意味を有するところにあり、筆者はたとえばある作品や他の作品から取り出した引用文の各周辺や他の箇所への目配りを課しつつ、その引用文の分析や注釈をなし得るのである。

だから用法の一である〈日常的用法〉の能力も上記に従わねばならず、筆者はそれから語りはじめる以外、「デカルト認識論試論」に本来属す他の用法を明るみに出す手立てがなくなると察知する。そこでまず、「筆者の論述」に当てはまる引用文は、もろもろの認識が最初に出現するとき、いかなる能力でいかに起こるかに関連し取り上げられる。そして、いわばこの「認識の起こり」の能力は、これがその時間的経過にあって、さらに〈日常的用法〉として別の能力を表出させるか、かの「かかわり」とのかねあいの時間的経過にあって、一方に〈真理の探求〉、他方に「もう一つの真理の探求」におけるおのおの別の能力を誕生させることにつながるかが明かされる必要がある⁽⁶²⁾。

「認識の起こり」の能力が〈日常的用法〉にはじまり、かの「かかわり」を通して伝わるか否かで他の用法に関与すると受け取らなくば、およそ、三つの用法の認識論に各相違した「認識の起こり」の能力の生じることが、三つの用法の各認識論でのおおの別の能力の誕生を促す、相互の関係を見失わせるにちがない。これでは各認識論が個別に存立するとみられども、その個別自体が、また「デカルト認識論」なる全体それ自体が整合し、まして一貫することは到底不可能になる。しかるにこの全体としての「かかわり」のなかで、〈真理の探求〉と「もう一つの真理の探求」の認識論同士は関係しない。おたがいが関係するとなると、両者間に新たな用法が入り用になろう。デカルトがその必要性を唱えたことはない。

かの「かかわり」が〈真理の探求〉にはともかく、「もう一つの真理の探求」にあると明確に認め得るは、⑤の⑦⑧⑨をみて知るように、シモーヌ・ヴェーユであり、かつ彼女を支持する筆者である。だから全作品のいずれかに対し、「もう一つの真理の探求」が存するというデカルトの明言はないにせよ、少なからずそのいずれかにて、彼はこの用法を暗示させていると受け止めておかねばならないのである（彼の引用文による証明は次回以降）。

この「もう一つの真理の探求」を含め述べられる三つの用法の認識論はおのおの、別の能力を生み出すことで構成されるかぎり、確かに個別で存立するといえる。しかしそのことは前もって〈日常的用法〉の認識論と関連させてからでないと、三つの各認識論さえ存するとは語られなくなる。そこから一つを取り上げ強調するのは人の自由であろう。だが人は一つを取り出したところで、三つの認識論を一括させる「デカルト認識論」なる全体を看取できないどころか、それこそ〈日常的用法〉が他の二つの各用法に何を根拠にして、いかなる「かかわり」をもたらし得るか見通せず、デカルトを誤まって理解してしまうであろう。それゆえ、三つの認識論がそれぞれで、または例の「デカルト認識論」が整合し一貫するという謂にとって、かの「かかわり」が除外されてはならない。

しかしながら、筆者はデカルトの諸思想をばかりか、いわゆる『哲学』を教わる経験をもたない門外漢でしかなく、それだけにシモーヌ・ヴェーユをわずかに知って着想し得た「筆者の論述」にまかせる以外に、彼の諸思想を考究する方法を見出せないし、「シモーヌ・ヴェーユとデカルト」での目的たる「デカ

ルト認識論試論」も実際筆者一人に帰して当然なのである。

それに、まずはかの「かかわり」で他の二つの用法の各認識論につながる土台として、〈日常的用法〉の認識論をめがけんとしたり、次にたとえば〈真理の探求〉での存在論や実践論はまさに〈真理の探求〉の認識論のうえに成ると見通していたり、そしてシモーヌ・ヴェーユによって語られる、⑦の〈もう一人別のデカルト〉や〈生き返ったデカルト〉と⑧⑨の〈新しいデカルト〉における用法の認識論を「もう一つの真理の探求」のそれとして明示させたりするのも、他ではない筆者である。

さらに、筆者の論じる、〈日常的用法〉の認識論をはじめ、〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」の各認識論がすでに流布された思想であるならば、ここに同じように繰返す非は、あるいは筆者の論じる各認識論がシモーヌ・ヴェーユの、とりわけてデカルトの主張する各認識論から遠く離れた思想であるならば、その真意を汲み取れない非は、むしろ彼らにではなしに、彼らの各作品の浅い読みに終始し、さらに和洋の研究書も参照しなかった筆者にあらうし、少なくともデカルトの各認識論を確認することで浮かび出る彼の像は、筆者だけのデカルト像として刻まれるであろう。

筆者が「デカルト認識論試論」をどこに立たせ語り得るかという説明は以上でひとまず終わらせ、遅ればせながらも、これ以降は先きの引用文⑤の分析や注釈と展開を試みることに当てていかなければなるまい。思うに、⑤の①から④は、〈読者たち〉がデカルトを〈外から〉、〈断片的に〉〈知る〉ことを、あるいは彼の〈これこれの〉という個別的思想にとどまって〈考察〉することをやめ、〈デカルトになり切〉る必要があることを教示している。〈デカルトになり切れる〉ならば、筆者が問う認識論的思想さえ、〈読者たち〉は〈外〉ではなく、内から〈考察〉できるであろうとシモーヌ・ヴェーユはいわんばかりである。

わけても①と②は注意せずにおれない。たとえばデカルトのある作品にみられよう認識論的思想を〈外から〉、〈断片的に〉、個別に〈考察〉せんとすれば、それは〈読者たち〉にとってあげくの果てに、〈不明瞭、難点、矛盾以外の事柄を見出すことはない〉と強調されるからであろう。するとデカルトの思想を「筆者の論述」に従わせるべく、いくつかの作品から〈断片的に〉かき集めたに

すぎない「認識論」の試みは結局、①と同じことになるのではないか。しかし既出引用文①のある語句を後段に述べるように解釈すれば、そうはならないであろう。そこがこの「認識論試論」で筆者をしてどこに立たせるかを自らに確信させる付記になると同時に、注意すべき点に相当してくる。

シモーヌ・ヴェーユは①で、〈わたしたちがデカルトのうちに不明瞭、難点、矛盾しか見出しはしないということに、何か驚くべきものがあるか〉といていた。そこでこのなかの〈デカルトのうちに (en Descartes)〉なる語句をどう捉えるかによって、筆者の試みは、①が語ることと同じにはなり得ないと断じてかまわぬのである。①から①に続く文脈にあって、①の〈デカルトのうちに〉は、①の〈これこれの事柄〉に関与し当てはめられるので、〈これこれの事柄〉をたとえば彼の思想という語句に置換させるならば、彼のすべての思想ではなく、個別の思想をさすと受け取る必要がある。だから①や①で彼女のいう〈不明瞭、難点、矛盾〉は彼のすべての思想でなしに、個別の思想に〈見出〉されるし、個別の思想はこのとき、次のように理解されていなければならない。

「個別の思想」とは確かに当初は〈断片的〉な〈これこれの事柄 (思想)〉でしかない。それでも、各〈事柄 (思想)〉は②の〈デカルトの思惟〉よりもたらされるからして、筆者がこの〈思惟〉に関する語句の含まれた文章 (引用文) を寄せ集め、たとえば⑤の示唆した〈真理の探求〉としての「認識論」に組みさせるよう振り分け得るならば、〈真理の探求〉の「認識論」という「個別の思想」が成立するにちがいない。それに筆者の試みは〈真理の探求〉の場合でも、ある「認識の起こり」からその認識の生成までの彼の認識論的思想がいかにあるか、順次追いかけて探ることになるのだから、筆者はどうしても彼の諸作品もしくは全作品を対象にせざるを得ない、とどのつまりいかにあるかに適当する引用文は「いかなる作品からでも随時抽出し得る」ことを確信する。

だがこれも前記した通り、⑤の〈真理の探求〉の認識論たる「個別の思想」は、ある作品だけで完璧に仕上がりとめ上げられてはいない。筆者はそのために、デカルトの諸作品もしくは全作品に目を通す必要があると繰返したわけである。なぜならこの作業のなかではじめて、③④と⑤でそれぞれいう〈デカルトになり切〉(デカルト的であ)らねば、彼の〈思惟〉を〈注釈〉できないとする、②の〈デカルトの思惟は外から注釈され得る思惟ではない〉ことが

分かるし、何らの作品も読まず、彼の思想を〈外から〉聞きかじるのみでは、少なくとも〈être cartésien (デカルト的である)〉ことが不可能になるからである。

㉔の〈デカルトの思惟〉に㉕や㉖をかかわらせてみると、㉖の〈デカルトらしき巧みな企て〉は㉕の文意に引き続いてあるから、〈真理の探求〉における〈デカルトの思惟〉が、すなわちその認識論がまさに「巧妙」な構成によってかたちづくられることを意味させずにいない。ましてや〈デカルトの思惟〉は彼の諸作品もしくは全作品に、〈巧みな企て〉といわれるほど組み込まれていなければならないのだから、何も〈真理の探求〉の認識論用だけに当てはまるのではなくろう。

それに〈読者たち〉の一人をシモーヌ・ヴェーユにしていようと、彼女が〈デカルトの思惟〉なるものに〈真理の探求〉の認識論や、㉗㉘㉙と㉚で記す〈日常的用法〉と「もう一つの真理の探求」の用法の各認識論を加えおかないかぎり、別言すると筆者が〈デカルトの思惟〉を自らにいう「認識論」なる全体として見定めおかないかぎり、彼の諸作品もしくは全作品を組み立てている〈デカルトらしき巧みな企て〉が一向に見えてこないのは、さらに彼女本人こそ以上の理解に立たずに、〈デカルトになり切れ〉ないのは、彼女にとって確かであろうと予想できる。

なおデカルトの思想を認識論に限定させていえば、上記三つの用法の各認識論を含めた表現こそ、㉛の〈デカルト説〉であろう。つまり㉜に記される〈デカルト説〉と異なり、㉝の〈デカルト説〉は〈真理の探求〉の認識論だけをさすのではなく、他の認識論をもともに有するのである。これが一つに終始してしまうならば、㉝では他の認識論が語られよう㉗㉘㉙は生きてこないであろう。そこで認識論的思想をもって〈デカルト説〉とみなすに、㉝や㉞から、〈デカルト説〉とはシモーヌ・ヴェーユにとって、三つの認識論を一括させたり、各個別に存立させたりして捉えられる用語になる。これは同時に、彼女をはじめとする〈読者たち〉が〈デカルトになり切〉っていったことである。するとこのとき、㉟にいう、〈断片的〉な〈これこれ〉の認識論的思想やある用法の認識論（個別として確立した認識論）だけでなしに、「認識論」なる全体（一括された三つの認識論）として受け取るそれさえも、〈不明瞭、難点、矛盾〉をまぬがれ得るか否かを質さなければならない。

だがここで改めてその答えを導き出すまでもなかるう。要するに筆者が既出

引用文①をすでに持ち出し、そこに書かれる〈不明瞭、難点、矛盾〉は三つの各個別の認識論（思想）にひそむとみた以上、シモーヌ・ヴェーユが自らに了知する〈デカルト説（各個別の思想）〉を、いかに①の〈外から〉ではなく、④のごとく、〈デカルトになり切〉って〈考察〉しようとも、各個別の思想はそろって〈不明瞭、難点、矛盾〉以外に達し得ないばかりか、他方でこの〈デカルト説〉を、たとえば彼の主張する存在論や実践論に並び称されよう「認識論」（なる全体）として見立てても、そこでは三つの各個別の認識論（思想）がいわば同居せずにはいないから、各個別の思想の何らかの〈不明瞭、難点、矛盾〉がその〈デカルト説（「認識論」なる全体）〉にそのまま影響せざるを得なくなるわけである。（そしてここからも、筆者の試みは諸作品もしくは全作品に目を通し、その引用文を「いかなる作品からでも随時抽出し得る」ことにあるのが間違っていないことを確認できる。それは彼女が各個別の思想に〈不明瞭、難点、矛盾〉を見出せると断じるのだから、その〈不明瞭、難点、矛盾〉を筆者なりに打ち出すにあっては、少なからず諸引用文を各個別の思想に振り分け、一個別の思想としてまとめ上げる作業を筆者に課することが、彼女と同様に要求されるからである。）

だから筆者はこれまでに、シモーヌ・ヴェーユのいう〈不明瞭、難点、矛盾〉が〈真理の探求〉や〈日常用法〉の各認識論のいずれにあるかを、彼女の指摘する点を掲げ検証するほか、筆者のみた点も加えながら、証してきたつもりである⁽⁶³⁾。今回取り上げる「もう一つの真理の探求」の認識論に関しても、上記と同様である。筆者は、彼女のいうこの〈不明瞭、難点、矛盾〉の検証や筆者なりにこれらを見つけ出しては試みられる証明によって、「認識論」なる全体をも見渡せる、自らの「デカルト認識論試論」での目的が、各個別の思想（認識論）における〈不明瞭、難点、矛盾〉をそれぞれ打ち出すことにあるとここきてようやく定め得るのである。

しかし筆者が個別の思想（三つの用法の各認識論）やこれらをいっしょにする「認識論」なる全体を、すでに各自「整合し一貫する」思想であると指摘したのに対し、前段で語られたことは、それこそ〈矛盾〉してはこないのか。〈矛盾〉ばかりか、〈不明瞭〉や〈難点〉といわれることも、「整合し一貫」しないことの証しとなるのではないか。

たとえば、⑥の〈真理の探求〉の認識論でいうと、註(62)でも触れたが、

「認識の起こり」は身体 (corps) または脳 (cerveau) 自体にはなく、〈思惟 (理性)〉が働く〈精神 (esprit)〉で生じることになる。それは〈真理の探求〉にあって、〈esprit〉が脳を含めていう身体と切り離されていなければならなかったからである。しかしデカルトが〈思惟〉能力は脳に伝えられる身体 (五官や内臓器官) の機械的運動たる感覚や想像を「思惟しない」と断じておきながら、その〈思惟〉能力がいかに「思惟しない」で感覚や想像を排除させ得るか明確にしていない。また㉔㉕の前半に述べられる〈日常的用法〉の認識論でいうと、身体での「認識の起こり」となる、感覚 (sens) や想像 (imagination) の各能力が〈精神 (âme)〉に伝達される際に、彼が〈âme〉をいかに脳に代表させるといっても、その二つの部位 (〈腺 (glande)〉と〈脳本体 (substance du cerveau)〉) だけをもってあらわそうとするのは、〈難点〉になりかねない。さらに㉔㉕の後半と㉖㉗㉘から確信できる「もう一つの真理の探求」の認識論でいうと、とくに㉘にあって、その注釈も後述に譲るが、この認識論は〈日常的用法〉とかわらずにいないから、こうした实在論と〈真理の探求〉たる観念論を確実に混在させる、換言すると相反するものがいっしょにあるという〈矛盾〉があらわとなる。

そして三つの認識論をともに組みさせていわせよう「認識論」なる全体でいうと、繰返すが、各認識論はかの「かかわり」にある、詳しくは〈真理の探求〉のそれが〈日常的用法〉の感覚や想像を〈esprit〉では排除する「かかわり」にある、また「もう一つの真理の探求」の認識論が〈真理の探求〉を基にはするが、しかしそれよりも〈日常的用法〉の感覚や想像を〈esprit〉として受容する「かかわり」(このときこれらの能力は〈日常的用法〉としてではなく、「もう一つの真理の探求」として語られる能力となる) にあると捉えられるがゆえに、「認識論」なる全体とは、㉔㉕が示唆しよう〈デカルト説〉が三つの認識論を個別に有することはむしろ、さらにシモーヌ・ヴェーユにあっては、「もう一つの真理の探求」をして〈デカルト説〉の代表たらしめることを含意させるかのようである。なぜならこの用法だけで、そこに〈日常的用法〉と〈真理の探求〉が含まれていると見て取ることができるからである。だが〈デカルト説〉がこの全体とみられても、今度はまた今度で、各認識論の前段での例のような〈不明瞭、難点、矛盾〉が持ち込まれ回避不可能になるは確かである。

ただしここに、各認識論を個別に含ませるとみる〈デカルト説〉や、「認識

論」なる全体をさす〈デカルト説〉の場合でも、〈日常的用法〉の認識論こそ要（土台）に位置づけられると、またデカルトは「認識論」なる全体の〈精神〉が〈esprit〉や〈âme〉のいずれで捉えるか明示していないが、それでも既出引用文⑱⁽⁶⁴⁾を参考にすると、そこに〈精神〉は〈同じ一つの精神（le même esprit）〉として記されるから、シモーヌ・ヴェーユが〈デカルト説〉に暗示させよう「もう一つの真理の探求」の〈精神〉は〈真理の探求〉のそれと同様な〈esprit〉を充当させてよいということをつけ加えておく。

とまれ、個別の認識論であれ、「認識論」なる全体をもってであれ、各語られる「デカルト説」には、シモーヌ・ヴェーユの指摘をはじめとする〈不明瞭、難点、矛盾〉がまったく見当たらないとはいえないであろう。既出引用文⑰や⑱⁽⁶⁵⁾を例にして、両引用文も〈不明瞭、難点、矛盾〉を惹起させるとみるならば、この成因は両引用文に記される諸能力に対して、デカルトが〈esprit〉あるいは〈âme〉のいずれの〈精神〉の諸能力であるかを明示しないことにある。だからその諸能力は〈esprit〉にも、〈âme〉にも使用されてかまわぬわけである。別言するといかなる〈精神〉の能力かを指示しない⑰や⑱⁽⁶⁶⁾にあつては⁽⁶⁶⁾、両引用文の何らかの能力が三つの用法の各認識論の能力に用いられてよいことを含意する。

これをまた、⑰や⑱の両引用文にみられよう〈巧みな企て〉といわずして、何んと表現し得るのか。前段での例からの「巧妙」さこそ、三つの用法に達するほどに仕組まれるばかりか、各認識論をかたちづくらずにいないことを、かつたとえば〈デカルト説〉さえ多意に捉えさせることをさしたのである。だから〈不明瞭、難点、矛盾〉の成因はこの「巧妙」さにあるといわねばならない。要するに各成因は筆者が思うに、デカルトが「巧妙」さに目を向けるだけであつたり、もしや「巧妙」さをてらうあまり、シモーヌ・ヴェーユが洞察した〈デカルト説〉の根本的誤まり（前記した通り、観念論と實在論が混在する〈真理の探求〉たる用法は〈矛盾〉である⁽⁶⁷⁾）を犯すことに、また先きの例からの結果、とどのつまり何らかの能力の三つの用法への適用によって、〈デカルト説〉にその多意とからみあいもたらされる結果、彼が何らかの能力の細部をつめようとしても、各用法との関係での何らかの能力の検討が次から次と新たに課されるために、そのすべてに答えられずにいるとすれば、これをしていわば、「巧妙」さの縫い目をほころびかけさすといわせることにあつたのではなからうか。

その通りなのである。

しかしながら、一方でデカルトの名譽を汚すことなくいえば、筆者は以上をしても、多意の〈デカルト説〉がそれぞれ「整合し一貫」する認識論的思想であることを否定したりはしない。なぜなら、ことがこの認識論的思想でも、多意の認識論がおのおの「整合し一貫」しないと見て取られるならば、彼を哲学者と一般に称することは、また彼を「整合し一貫」した哲学の持主と捉えられずば、筆者が彼を哲学者とみることは不可能であろうからである。そのうえ彼が「Je pense, donc je suis (わたしは思惟する、それゆえにわたしは存在する)」と語るように、認識論よりはじめて、存在論や実践論へと展開させようと察知し得るは、彼が三部門にわたる体系を持ち合わせるがゆえに、体系を哲学と呼び、彼を哲学者に位置づける以外にないからである。

ところが多意の各認識論に〈不明瞭、難点、矛盾〉がみられるとしたシモーヌ・ヴェーユにとっては、彼女が⑩⑪で述べるごとく、デカルトを哲学者でなしに、〈思想家 (penseur)〉と、しかも〈fictif〉を形容して呼ぶからして、彼の思想を哲学として捉えられることはないと推測する。彼女のいう〈fictif〉には、彼が〈デカルトらしき巧みな企て〉によって、たとえば三つの用法の各認識論を含めた彼の思想のすべてをそのあるべき姿を求めて、「整合し一貫」させようと試みんとしたことが含意される。そこに立つと、筆者は〈fictif〉を前回での〈見掛け倒しの〉⁽⁶⁾より、上記に従って、彼を〈理想を夢見続けていたい (思想家)〉の訳を当てる方が〈fictif〉にふさわしくなると断じおく。

さて⑩でいまだ注釈せずじまいの箇所に戻ると、以下が取り上げられる。⑩⑤の〈何人...の権威〉と記される〈何人〉とは、デカルト信奉者をさすにちがない。〈デカルト的〉である〈読者たち〉や〈注釈者〉は〈何人〉の、ましてやデカルトの〈権威〉に臆することなく、自ら生得に有する〈思惟 (理性)〉のみにより、〈明晰で判明〉な観念を獲得するためには、この〈思惟 (理性)〉が身体感覚や想像の各能力と無関係な対象に対して、〈秩序立てて吟味する〉ように働きかけねば、〈真理〉を〈探求〉することができなくなるのである。

またシモーヌ・ヴェーユは⑩⑤にあって、〈真理の探求〉のことを一般的に述べただけにすぎずとも、そこには、シモーヌ・ド・ボーヴォワールとともに⁽⁶⁾、二人のシモーヌの学士論文の指導教授であったとされるブランシュヴィック

(Brunschvicg)が、〈Il n'est pas inexact de classer Brunschvicg parmi les représentants de l'idéalisme (ブランシュヴィックが観念論の代表者中に入るのには間違っていない)〉⁽⁷⁾との指摘から、もしや〈デカルト信奉者〉ないしは共鳴者の一人に数えられるといい得るならば、おそらくシモーヌ・ヴェーユをして、〈何人(デカルト信奉者)...の権威をまったく信頼することなしに〉と語らせるは、〈何人〉がもとよりブランシュヴィックになり、彼が彼女の論文の独自性を見抜けなかったことから、よき指導と〈信頼〉を得られなかった彼女の彼に対する揶揄が含まれ、そのためもあるうか、学士論文を思いもよらぬ、二十点満点の十点の評価にさせたといえる。

⑤⑥の〈デカルトラしき巧みな企て〉は⑤の文脈を引き継ぐので、まずは〈真理の探求〉の認識論にこそ当てはまるであろうし、およそこの⑥までは、〈真理の探求〉が中心となって語られるであろう。その点で⑩の〈デカルト説〉は〈真理の探求〉の認識論をさすに限定されるが、しかし⑦や⑧のみを参考にしても、前記した通り、〈デカルトラしき巧みな企て〉は⑦や⑧の用法にさえ及んで、〈日常的用法〉の認識論の〈デカルト説〉と、シモーヌ・ヴェーユにとっては、上記した各認識論がかの「かかわり」を有して結びついたとされる「もう一つの真理の探求」の認識論の〈デカルト説〉すら自ずから構築させることになったのである。この認識論はそれ自身、筆者のいう「認識論」なる全体そのものになることを含意させるだけでなく、全体の一を構成する認識論であることを、だからこそ彼女には、三つの認識論それぞれで抱え込む〈不明瞭、難点、矛盾〉がこの全体の捉え方でも消え去りはしないことを、ここで今一度想起すれば十分なのである。

そのうえ以下もすでに述べたことと関係するやもしれぬが、既出引用文⑦や⑩⁽⁷⁾の諸能力が三つの用法の認識論のいずれにも使用できることは、そこに使用制限(たとえば〈真理の探求〉における身体や脳の感覚は〈esprit〉にとって排除された)があるにしろ、〈デカルトラしき巧みな企て〉に則ってのことを明かさずにいない。またデカルトがこの〈巧みな企て〉に頼るとシモーヌ・ヴェーユにみられることは、彼が〈理想を夢見続けていたい思想家〉であることを証してくるかもしれない。そして〈巧みな企て〉の編み目からもれたものがあることは、即〈不明瞭、難点、矛盾〉につながらせることを示唆させるやもしれぬ。あるいは〈脳本体(substance du cerveau)〉や〈理性的精神(âme raisonnable)〉

のように、同じ部位をさす語句が複数の原語で振り分けられたり、〈孔 (trou ou pore)〉のように、同じ邦語に訳出しても、その意味が相違したりする⁽⁷²⁾ことは、些細なことであるにせよ、〈不明瞭、難点、矛盾〉のいずれかを惹起させる因になりかねないと察知する。だから繰返してでもいわねばならぬこととして、筆者が彼を〈思想家〉でなしに、哲学者に位置づけさせてみることにあるならば、彼の認識論的思想がそのすべてにわたって「整合し一貫」しているか、はたまた〈不明瞭、難点、矛盾〉が巣くうといった、〈巧みな企て〉のいづこをしてその編み目たらしめるかは、筆者なりの答えを見出すほかないであろうと指摘するまでなのである。

それはともかく、次の⑥⑦の前半の文章にあって、これがなぜ〈日常的用法〉に充当するかを明かすことにある。次回に掲げる引用文⑥の冒頭文章〈わたしたちは生きものである〉中の〈生きもの〉に関連していよう、⑦の〈わたしたちの生きている世界 (の事柄)〉の一が、⑥までに語られた〈真理の探求〉の世界とは違った〈別の (事柄の) 世界〉になるという表記は、〈生きもの〉の、〈生きている〉証しを精神 (esprit や âme) だけでなしに、身体 (corps) にも求めずに成り立たない〈世界〉をさしてくる (〈生きもの〉は精神と身体を有して〈生きている〉)。つまりこの一としての〈世界〉は〈混沌のようなものから始まり、すべてが表象と運動によって調節される〉世界なのである。

〈混沌のようなもの〉は、身体とともに〈生きている〉〈生きもの (わたしたち)〉の〈世界〉にとって、デカルトが〈真理の探求〉での〈精神 (esprit)〉の〈思惟〉だけを行使して即座に獲得できると語る⑤の〈明晰で判明〉な世界ではなく、これとは〈別の (事柄の) 世界〉のことをあらわしている。また〈混沌のようなもの〉を引用文⑥ (次回掲載) の語句をかりて繰返すと、それは〈外来的な事物 (対象)〉を〈精神 (âme)〉よりか、まずは身体 (器官) で受容する、漠とした〈外来的な何か〉でしかないのである。そして〈外来的な何か〉はその〈すべてが表象と運動によって調節される〉ことになる。だからここに記される〈表象と運動〉は〈脳 (âme)〉の各働きになると断じてよからう。〈表象〉は確かに〈âme〉に特有のことであるにしろ、しかし〈運動〉が働きかけられると働きかけるを含意するのであれば、この受動と能動は〈âme〉のみか、身体の機能でもあるといっておかねばなるまい。以上から〈真理の探求〉ではない用法が、すなわち〈日常的用法〉が浮上してくる。その認識論はだか

ら、身体感覚や想像をまき込んだ、〈âme〉での認識がいかにあるかを質すにある。要するに、シモーヌ・ヴェーユは⑦の前半で、〈生きている〉〈生きもの（人間）〉の一つの生き方としての用法が彼に一見できることを明示したということである。

なおここで付記させるべきは、まず一に、〈日常的用法〉という名称は前記⁽⁷³⁾もした通り、筆者がこれにデカルトの記す語句（l'usage ordinaire）を当てはめたことに起因もするから、筆者によって名付けられたとあってよい、換言すると筆者が命名しよう〈日常的用法〉は彼が書き込んだ語句を出所にすると、また一に、〈デカルト説〉が〈真理の探求〉の認識論のみにとどまってしまうと、およそ〈日常的用法〉の認識論に言及しているであろう、彼の作品たる、『人間論』（1630-33年）、『方法序説』（1637年）の第五部、『省察』（1641年）の第六部や『情念論』（1649年）は何んのために書かれたのかと、そして一に、三つの用法の各認識論において「要に（土台に）」なし得たのは、〈日常的用法〉の認識論であると前記したことにあって、そうだとすれば〈不明瞭、難点、矛盾〉は何より〈日常的用法〉の認識論にあらうということである。

さらに⑥⑦の後半の文章、ならびに⑧⑨や⑩がどうして筆者のいう「もう一つの真理の探求」に充当するとみられるかである。まず、シモーヌ・ヴェーユはそれらに、〈もう一人別のデカルト〉、〈生き返ったデカルト〉や〈新しいデカルト〉と記すだけで、「もう一つの真理の探求」とは明記していないが、それでもその⑦の〈もう一人別のデカルト〉や〈生き返ったデカルト〉の各語句が同⑦の〈デカルトがわたしたちの生きている世界の事柄への正しい考えを抱くにあって〉というもう一つの〈生きている世界〉にかかわることを示唆させられたり、さらに筆者が⑧の〈数学的物理学的知识〉、⑨の〈人間的存在であることと、自分自身だけを信じようと決心したこととを共有する〉や⑩の〈絶対的懐疑に基づく同様な見解〉という語句と文章に触れたりするならば、これらの語句と文章によって、〈真理の探求〉を基にするが、それとは異なる「もう一つの真理の探求」を暗示させる用法があると捉えられてよいと同時に、これらの語句と文章は彼女にとって、もとよりその隠喩的な表現でしかならうと察知される。

次に、前段で引用した語句と文章を注釈するまえに、筆者は以下のことを振り返り、デカルトの特徴を把握しておく必要がある。前号⁽⁷⁴⁾にて、〈真理の探

求)や「〈日常的用法〉にとどまらない(とどまるならば、デカルトの思想はプラトンやアリストテレスの各思想を越えることができないであろう)、デカルト思想の独自性が打ち出されてこない」と述べた筆者はここで、シモーヌ・ヴェーユと同様に、デカルト思想の独自性を、とどのつまり彼の特徴を「もう一つの真理の探求」なる用法(を有すること)にみるといえるのである。デカルトは筆者の知るところ、アリストテレスの認識論に倣って、そこから〈日常的用法〉と〈真理の探求〉の各認識論を打ち立てた、換言すると〈真理の探求〉はアリストテレスにも語られる用法であるにせよ、当初より独立させて見出されたのでなしに、これもまたアリストテレスに指摘される〈日常的用法〉との「かわり」を前提にしたうえで生まれた用法なのである⁽⁷⁵⁾。

しかしデカルトは、〈真理の探求〉をプラトンから受け継いだ用法であると主張したように思われる。なぜならデカルトが(étant entré avec eux (saint Thomas et Aristote) dans un même chemin(聖トマスとアリストテレスと同じ道歩んだ)(原文括弧内は筆者))⁽⁷⁶⁾にもかかわらず、他方で〈la fausseté de ceux (principes) d'Aristote(アリストテレスの原理の不正確さ)(原文括弧内は筆者))⁽⁷⁷⁾を知っては、スコラ神(哲)学(アリストテレス主義)を批判することになったので、デカルトをはじめ、カルテジアン(cartésien デカルト信奉者)はアリストテレスの認識論の一面である〈日常的用法〉の認識論を前面に押し出せなかったのではないかといえるからである(前面に出すと、スコラ神(哲)学批判はできなくなろう)。

筆者には、デカルトよりも、むしろデカルト信奉者がスコラ神(哲)学(アリストテレス主義)に欠け、プラトンにあるとされるものを、すなわちデカルトも踏襲しよう、⑤の〈すべてを秩序立てて吟味する〉としたプラトンの分析方法を取り込むようにみえてくる。この分析方法のみに頼ろうとすることは、デカルトが提唱した、たとえば三つの認識論のうち、〈真理の探求〉の認識論にしか該当しなくなるのであり、デカルト信奉者は〈イデア(生得観念)〉に達せんとするこの用法だけを強調するほかなかったといえる。要はデカルト信奉者はデカルトが意図したこととは異なり、〈日常的用法〉のことを、つまり〈日常的用法〉がまた〈真理の探求〉の誕生の因子になることを忘却したか、その継承を拒んだということである(またはデカルトの認識論的思想を誤って解釈したといえる)。いわんや「もう一つの真理の探求」の用法があることなど

は、デカルト信奉者にとって論外であった（〈真理の探求〉しか信奉しない結果、今日の世界が構築されたが、しかし今や崩壊寸前なのは、その影響での自然環境の破壊などに立ち会っている、わたしたちの知るところとなる）。

「もう一つの真理の探求」は〈真理の探求〉を基にすることをのちに証すにせよ、ここでいえるのは〈真理の探求〉で語られるすべてをそのまま〈日常的用法〉に取り入れる「かかわり」で成る用法ではない、別言するとこの用法を確立させるうえで、〈真理の探求〉と〈日常的用法〉が既存のまままで合体するのではないということである（ただし筆者は上記の「かかわり」にあっても、〈日常的用法〉を「要」（土台）に据えると断じたのだから、〈日常的用法〉は既存のままに用いられねばならぬとみる）。なぜかというに、「もう一つの真理の探求」は、いわゆる〈真理の探求〉でなくとも、それといわずにおれない〈真理の探求〉と〈日常的用法〉をいっしょにして一にさせよう三つ目の用法となるからである。

しかし「もう一つの真理の探求」といわゆる〈真理の探求〉（前段をはじめ、これまで記してきた〈真理の探求〉のこと）とどこが異なるのか。理性の役割が相違する。この用法以外での理性には、次なる役目が担われていた。まず、デカルトは〈真理の探求〉の理性としてアリストテレスのいう〈能動的理性〉を導入した⁽⁷⁶⁾が、それでも本文註(76)や(77)から窺えるように、たとえば〈能動的理性〉による分析方法に不備を見出したためか、その代わりに分析方法に抜け出、さらに「形相」の意味を有することでは同様の、プラトンのいう理性が持ち込まれたのである。プラトンはまた、理性から感覚を排除した。デカルトのいう〈真理の探求〉での理性もこれと同じであった。だが感覚を排除するにあって、プラトンは靈魂に〈死の稽古（訓練）〉⁽⁷⁷⁾を課さねばならなかった。それが靈魂を浄化し、〈イデア〉に対峙し得る「形相」にさせることであった。ところがアリストテレスの靈魂やデカルトの精神（esprit）にとって、〈死の稽古（訓練）〉を伴わせる、いわば苦しみ（苦行）は必要なかった。前者の〈能動的理性〉や後者の理性は、最初から「質料（身体）」でなしに、〈イデア〉に等しい「形相」としてあった。これは両者が人間が生まれもつあらゆる能力のなかで、それぞれの理性をばもっとも優位に位置づけさせた結果からくることなのである。

次に、デカルトのいう〈日常的用法〉の〈自然的理性〉は、アリストテレス

という〈受動的理性〉ないしは〈実践的理性〉であった⁽⁶⁰⁾。〈受動的理性〉は、〈能動的理性〉にかかわりあうまえに、感覚能力が働いた内外の対象を受けるからして、〈受動的理性〉自身にとっては、〈思惟されるもの(能力)〉として作用する。その際〈受動的理性〉は対象(感覚)の「形相」を〈受動的理性〉の「形相」にするというが、この「形相」はさらに〈能動的理性〉の働きかけなくば、〈受動的理性〉での対象が完全な「形相」(本質)を獲得することにはなり得ない、つまり〈受動的理性〉においては、これが感覚(質料)を除外できずにいるために、不完全な「形相」でしかない。そのとき〈能動的理性〉は、要するに〈能動的理性〉を主張するアリストテレスは、〈受動的理性〉としての「形相」をどのように捉えんとするのか。別言すると〈受動的理性〉は、端から質料のない、〈形相の形相⁽⁶¹⁾たる〈能動的理性〉の働きかけをどこで受け得るかである。アリストテレスは〈受動的理性(思惟されるもの)〉をおよそ、〈能動的理性(思惟するもの)〉と〈同一〉、あるいはその〈属性⁽⁶²⁾にみなすから、〈受動的理性〉は〈能動的理性〉と同様に、靈魂(身体)の外にあることになるのであろうか。それでは〈受動的理性〉に感覚という「質料(身体)」が関与していたことはどう説明できるのか、筆者には明確に映ってこない。

デカルトの場合はどうかを補足すると、彼のいう〈自然的理性〉は、アリストテレスのいう〈受動的理性〉に相当していた。しかし〈自然的理性〉はそれ自体、「形相」でなしに、「質料」の能力として捉えられていたし、〈能動的理性〉に、つまりデカルトでいう〈真理の探求〉の理性につながることはなかった。要するにデカルトは、アリストテレスでいう〈受動的理性〉を「形相」たる〈能動的理性〉とかかわらせない能力となす一方で、〈受動的理性〉の感覚への作用にとどまる、これらの「質料」の能力をもって、〈日常的用法〉(の認識論)を立ち上げ得たということである。確かに〈受動的理性(自然的理性)〉が感覚に働きかけると、〈自然的理性〉自身も、これによって獲得される〈像〉(E⑦の表象)もアリストテレスのいう「形相」になるやもしれぬ。しかしデカルトにあっては、この「形相」はアリストテレスに比して、不完全でなければならない。なぜかは、もし〈日常的用法〉の〈自然的理性〉に、〈真理の探求〉の理性(の役割)が付与されるとするならば、〈受動的理性〉が完全な「形相」にもなり得るのだから、デカルトにとって、「形相」(本質)を理解せんとする〈真理の探求〉でなくとも、〈日常的用法〉だけで十分まかなえるし、たとえ

〈真理の探求〉や〈日常的用法〉なる各用法が相違するからこそ、あるといえども、〈日常的用法〉でこと足りるといっているのであれば、〈真理の探求〉という用法とその理性はもとより、無用の長物にしかなり得ないからであろう。

そして、上記した〈日常的用法〉の〈自然的理性〉で「形相」(本質)がみえてこないがゆえに、デカルトは〈真理の探求〉の理性のほかに、「もう一つの真理の探求」の理性を用意したと、シモーヌ・ヴェーユは少なくとも筆者に語りかけてくるのである。「もう一つの真理の探求」の理性は、〈日常的用法〉の「質料」である感覚や〈自然的理性〉に「かかわり」を有する理性なのである。この点でデカルトのいう〈真理の探求〉の理性とも、アリストテレスのいう〈能動的理性〉とも異なろう。前者の理性は〈日常的用法〉の諸能力にかかわらないし、後者の〈能動的理性〉は〈受動的理性〉のみにつながる(かかわる)能力であった。「もう一つの真理の探求」における理性をば、筆者はプラトンやアリストテレスのおのおのも語ったことのない、デカルト「独自の理性」と名付け得たのであった⁽⁶³⁾。換言するとこの「独自の理性」が感覚や〈自然的理性〉とそれぞれ「かかわり」あう用法が「もう一つの真理の探求」となる(次回の引用文㉔でその証左をすとしたは前記の通りである)。

その「かかわり」は例の引用文㉔の㉘㉙と㉚を中心にして確かめられる。㉔の〈人間的存在〉は㉗の前半と関連させられるからして、〈生きもの〉としての〈日常的用法〉を、同じく㉙の〈自分自身だけを信じようと決心した〉は㉕と関連させられるからして、〈真理の探求〉に類似した内容を盛り込ませており、㉔の〈新しいデカルト〉としていう「もう一つの真理の探求」は㉗の前半と㉕の内容たる各用法を〈共有する〉と記されることに充当している。すると筆者がすでに述べたことは、すなわち「もう一つの真理の探求」は〈真理の探求〉の〈共有〉でなしに、たんに「基」にするといったことは否定されるのか。否である。それは㉘の全文を読み、また㉚の〈絶対的懐疑に基づく同様な見解〉(とくに傍点箇所)に注意という語句に従うならば、〈真理の探求〉そのものをそのまま〈共有〉させることにはならぬであろうといえるからである。

引用文㉔㉕全体からする文意の筆者の注釈にあっては、上記の〈絶対的懐疑に基づく同様な見解〉という語句が〈真理の探求〉をさすと受け取られるならば、この語句は確かに、〈日常的用法〉との〈すべての相違とすべての明白な対立〉を示さずにおれないであろうということになる。しかしながら、〈真理の探

求)の理性は〈自由に導かれ〉ることはないはずである。理性が〈自由に導かれ〉ないのは、その(分析)方法のいわゆる《四規則》⁽⁶⁴⁾にしばられるからである。しかもこの理性は繰返していうが、〈日常的用法〉と「かかわり」あえる能力にならない。だから〈デカルト説に合わさるにちがいない〉当の用法は、〈真理の探求〉ではなくなる。さらにここに記されよう〈デカルト説〉が示唆するのも、〈真理の探求〉ではあり得ないし、〈合わさる〉ことを可能にする能力もまた、〈真理の探求〉の理性ではないことになる。すると当然のこと、その〈デカルト説〉をさす用法は〈日常的用法〉しか該当させはしなくなる。だから再度いおう。〈デカルト説に合わさるにちがいない〉とされる理性は、もはや〈真理の探求〉の理性や〈日常的用法〉の〈自然的理性〉ではなく、〈デカルト説(日常的用法)〉に〈合わさる(いっしょになって一となる)〉ことでいわせる、「もう一つの真理の探求」としての「独自の理性」でなければならなかったのである(「独自の理性」が何より〈日常的用法〉に〈合わさる〉は、「かかわり」あることの証しとなる)。かつ「もう一つの真理の探求」をしていうと、それはもとより、その「独自の理性」と、身体や精神(âme)の各感覚(ならびに想像)の〈日常的用法〉といういわばこの垣根を取り払って一になった用法となる(一になるこの用法では、精神が(âme)でなしに、(esprit)であることは次回に譲る)。

ここで三つの用法のそれぞれの理性についてもう一度整理し直すと、次の通りになろう。〈真理の探求〉の理性は、その導入にあって、アリストテレスのいう〈能動的理性〉を、その分析方法にあって、プラトンのいう理性を相当させると、〈日常的用法〉の理性は、アリストテレスのいう〈受動的理性〉になるのであって、デカルトはこれを〈自然的理性〉とみなすと同時に、この行使にとどまらせることをもって、〈日常的用法〉をさすと、「もう一つの真理の探求」の理性は、上記した〈能動的理性〉や「プラトンの理性」でも、〈受動的理性(自然的理性)〉でもなくなるからして、独自であるということである。

それでも〈真理の探求〉に〈基づく〉その「もう一つ」である以上、「もう一つの真理の探求」は、たとえ〈真理の探求〉に比して⑧の〈天分も、数学的物理学の知識も、文体の力も... 有し)ていなくとも、〈真理の探求〉の理性をまったく無視するわけにはいかないのではないか。別言すると「もう一つの真理の探求」の理性には、筆者がすでにいった「独自の理性」のほかに、〈真理の探

求)の理性の使用もかねることはないのか。またいかに「独自の理性」が〈日常的用法〉にかかわろうとも、「独自の理性」は〈自然的理性〉につながり得るのか、たとえばそれ以前の認識である感覚や想像に関与してのちに、いや関与せずに〈自然的理性〉につながるのか、はたまたデカルトが既出引用文⁽⁶⁵⁾で〈同じ一つの精神 (le même esprit)〉と語ったにしても、「もう一つの真理の探求」の「独自の理性」は〈真理の探求〉の理性につながるのか否か、以上のことは筆者のデカルト作品の読み込み不足に起因してこようが、今一つ鮮明になり得ないところなのである。

しかしシモーヌ・ヴェーユが⁽⁶⁾において、「もう一つの真理の探求」を打ち出す〈新しいデカルト〉が〈真理の探求〉を提唱した際の、彼の〈天分も、数学的・物理学的知識も、文体の力も〉ないとみたのはなぜか。〈天分〉といわせるにあっては、「独自の理性」はこれをしてプラトンやアリストテレスのいう各理性ではなくさせるわけだから、〈天分〉なくして成り立たぬであろう。だが明確な論理に貫かれた〈真理の探求〉の提示によって、たとえばスコラ神(哲)学を批判し一蹴できたときと比べて、前段に記したように、「もう一つの真理の探求」ではあまりにも不明な箇所が多くはないか。これは〈天分〉を欠いているとみられてもいたし方なからう。また〈文体の力〉といわせるにあっては、「もう一つの真理の探求」は⁽⁷⁾の〈混沌のようなもの〉に〈真理の探求〉を〈基〉にしての用法となるがゆえに、たとえば漠然とした文意にもなりかねず、その表現には確固たる力強さが失われていると彼女はいいたげであるごとく捉えられる。

さらにシモーヌ・ヴェーユに〈数学的・物理学的知識〉といわせるにあっては、彼女が他の箇所にも〈Descartes a identifié la géométrie, d'une part à l'algèbre, d'autre part à la physique (デカルトが幾何学を一方では代数に、他方では物理学に同一視した)〉⁽⁶⁶⁾と、あるいは彼が〈réduire la physique à la géométrie (物理学を幾何学に帰着せしめる)〉⁽⁶⁷⁾と記すことにより、筆者がわけても〈物理学的知識〉を「幾何学的知識」に換言すると同時に、換言語も当然〈数学的知識〉のことをささずにおかないと捉えれば、デカルトが〈Je me plaisais surtout aux mathématiques, à cause de la certitude et de l'évidence de leurs raisons (わたしは数学の推理の確実さと明証さのせいで、とくに数学が気に入っていた)〉⁽⁶⁸⁾と語るにしろ、「もう一つの真理の探求」では、その〈確実さと明証さ〉を有する〈数

学的（物理学的）知識が十二分に盛り込められないとされるわけである。

そして注釈の最後に、引用文⑩の〈絶対的懷疑に基づく同様な見解〉という表現が、「もう一つの真理の探求」のことを示さざるを得ないのを見ておこう。〈絶対的懷疑〉とは〈真理の探求〉において、何らかの〈真理〉の獲得に向けて支障となる、〈éviter soigneusement la précipitation et la prévention（速断と偏見を念入りに避ける）〉⁽⁸⁹⁾ ための〈懷疑〉なのであり、この（分析）方法の四規則中の第一規則をして、一般に「方法的懷疑（un doute méthodique）」といわせるのと同意であるにちがいない。だが〈絶対的（方法的）懷疑に基づく〉に続く〈同様な見解〉は、もし〈真理の探求〉をめがける〈見解〉だけのことをさすのであれば、何も〈同様な〉という形容詞は〈見解〉を修飾しないはずである。万が一〈絶対的懷疑に基づく見解〉が〈真理の探求〉を示唆させるといったにしても、そこでの〈見解〉は何より次なる方法（第二）の規則に従わねばならず、〈自由に導かれ〉ることを不可能にさせたのである。

以上の長い段落にわたっての注釈をようやく終えていえることは、デカルトに記される次に掲げる文章がなぜか筆者には、およそ認識論的思想にかぎってみても、彼の全作品中に三つの用法の各認識論の、とりわけ「もう一つの真理の探求」の認識論のあることを『デカルトにおける科学と知覚』にて洞見したシモーヌ・ヴェーユにもっともふさわしくあろうと指摘できることである。なぜなら、一般に〈真理の探求〉と〈日常的用法〉は、ならびにその各認識論はあると語られども、彼女の登場までそれ以外は見向きもされず、彼女にとっても「もう一つの真理の探求」（ならびにその認識論）という名称を与えるしかない〈新しいデカルト〉を、彼女は『デカルトにおける科学と知覚』の第二部で展開しているとみることができるからである。

⑩ Je sais bien aussi qu'il pourra se passer plusieurs siècles avant qu'on ait ainsi déduit de ces principes (les vrais principes) toutes les vérités qu'on en peut déduire.⁽⁹⁰⁾ (括弧内は筆者)

わたしは、人がこれらの原理（真の諸原理）から演繹し得るあらゆる真理をかく演繹し終えるのに、数世紀を要するであろうことをよく知っている。

この引用文中の主張はまず、〈あらゆる真理〉は〈真の諸原理〉から〈演繹〉的に導き出される、換言すると〈真の諸原理〉は〈あらゆる真理〉を〈演繹〉的に導き出す（たとえばデカルトの認識論的思想において、〈真の諸原理〉たる〈日常的用法〉を要にすると、〈日常的用法〉は〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」の各〈あらゆる真理〉を〈演繹する〉）ということにある。〈これらの原理〉とは、この引用文の前段落にあって、括弧中に記した〈真の諸原理〉に等しいし、さらに段落を溯っては〈これらの原理〉の一に数えられて、筆者のみる認識論を語るであろう〈les principes de la connaissance（認識の諸原理）〉⁽⁹¹⁾をさしている。〈認識の諸原理〉という語句中の〈原理〉たる語が複数なのはもはやいうまでもないが、〈デカルト説〉に三つの用法にわたる認識（論）があり、それぞれはそれこそ〈認識の原理〉を有さずにおかないからである。たとえば感覚を排除するは、〈真理の探求〉なる用法の一〈原理（根本的な規範）〉である。〈これらの原理（複数表記）〉すなわち〈真の諸原理〉は再度いうが、筆者のみる〈諸原理〉の一としての三つの用法の各〈認識の原理〉を合わせもつことにも相当し、三つの用法の各認識（論）における〈あらゆる真理〉を導き出すうえで根本的な規範になるというわけである。たとえば〈わたしは思惟する〉間は、〈わたしは存在する〉という〈真理〉こそ、〈真理の探求〉なる一用法での、〈あらゆる真理（複数表記）〉に与する一である。

そして引用文⑩から、筆者はデカルトの語るように、彼の死後〈数世紀を要〉して、認識論的思想の〈あらゆる真理〉の一に加えられよう、三つ目の「もう一つの真理の探求」なる用法の認識論のあることを、『デカルトにおける科学と知覚』の本論たる第二部にて、そのうえ〈不明瞭、難点、矛盾〉として喝破したのは、シモーヌ・ヴェーユを措いてほかにいない、とどのつまり三つ目の用法での認識論的思想をもって、その〈あらゆる真理〉を〈演繹し終え〉た〈人〉は、彼女以外に知り得ない（またデカルトの方からいえば、彼が諸作品に「もう一つの真理の探求」（の認識論）を秘めさすことを意図せずに、〈演繹し終えるのに、数世紀を要する〉とは記さないはずである）というしかないのである。

〈あらゆる真理〉には当然、デカルトの存在論的、実践論的各思想などにおける〈真理〉も組み入れられてくるが、それでも註(91)の〈認識の諸原理〉によってもたらされる〈あらゆる真理〉の方が、存在論的、実践論的各思想などの〈あらゆる真理〉より先にくることは、すでに指摘したところである。つまり認

識論的思想の〈あらゆる真理〉を〈演繹し終え〉たシモーヌ・ヴェーユが、彼の表現を用いては〈Je souhaite que nos neveux en (d'une étude) voient le succès (願わくば、わたしたちの子孫が、この(研究の)成果をおさめられんことを) (原文括弧内は筆者)〉⁽⁹²⁾ という一〈子孫〉であるにせよ、彼女は彼の認識論的思想での〈あらゆる真理〉を〈不明瞭、難点、矛盾〉とみなしたのだから、さらに認識論的思想のうえに成り立つといえた存在論的、実践論的各思想の〈あらゆる真理〉もそのために、〈不明瞭、難点、矛盾〉をまぬがれなくなるのだから、彼には否定的〈成果〉をもって答えるほかない一〈子孫〉であろう。だがそこに彼女が彼を〈理想を夢見続けていたい思想家〉とみたことをあわせ推察すると、彼が〈理想〉を追い求めて、しかも追い切れずにいたと察知されるだけに、彼のいう〈あらゆる真理〉が彼女にとって〈不明瞭、難点、矛盾〉に結びつかせようが、しかし筆者はこうした批評(批判)を批評(批判)として受け取る一方で、彼女はデカルトに対しては、たとえば彼女が論文で取り上げたデカルトの真のねらいを評価してもらえず、対立を深めたかの指導教授ブランシュヴィックにみせるほどの毛嫌いはなかったと読むことができるのである。

要するにその論文『デカルトにおける科学と知覚』にあつて、シモーヌ・ヴェーユによる「デカルトの真のねらい」とは、もとより〈新しいデカルト〉の提唱をさし、〈新しいデカルト〉の一面あることを確認させよう、前記した「独自の理性」が用いられればこそ、「独自の理性」が〈新しいデカルト〉たる「もう一つの真理の探求」の認識論を組み立て得るということにある。この〈新しいデカルト〉としての、彼にみられる「独自の理性」なかりせば、これが一真理に達する原動力になるかはともかく、プラトン(紀元前427年-347年)やアリストテレス(紀元前384年-322年)の各認識論的思想(わけてもその各理性)を越えられはしなかったであろうと繰返しおく。

しかも筆者にとって、「もう一つの真理の探求」の認識論にて、デカルトが〈日常的用法〉での感覚や想像といっしょになる「独自の理性」をもって、プラトンやアリストテレスの各名称と役割とは相違しよう能力を提起していたようにみえるのみか、イマヌエル・カント Immanuel Kant (1724年-1804年)が企てた〈感性 Sinnlichkeit (感覚のこと)〉を取り入れる〈悟性 Verstand〉あるいは〈理性 Vernunft〉のあり様に相似すると捉えられるならば、デカルトのカント的といえるこの「独自の理性」は、プラトンやアリストテレス以降、カント以前

においてカントより一早く打ち出された能力であろうといっておきたい。

デカルトは、カントがおそらくデカルトの〈真理の探求〉での理性をさして、いまだ神（イデア）に依存する理性であると批判したような、上記したカント理性の働きの成り立ちに似て、神（イデアまたは形相や超自然）から脱し得るとみてよい「独自の理性」をも掲げおいたのだから、デカルトがむしろ、その〈真理の探求〉のアリストテレスやプラトン流の理性と、〈日常的用法〉のアリストテレス流の理性のあることを打ち立てるほかに、〈新しいデカルト〉としての独自色を出すのに、この「独自の理性」をさらに前面に押し出さねばならぬことを「デカルトの真のねらい」とせずにおれなくさせるのであり、シモーヌ・ヴェーユにとっては、「独自の理性」を中核にする「もう一つの真理の探求」（の認識論）も〈デカルト説〉に欠いてならないことが明かされてくるわけである。

しかし以下の段落すべてに記すことも繰返しにならうが、それでも拙論の最後にそれをまた喚起させておきたい。筆者はデカルトの全作品やシモーヌ・ヴェーユの『デカルトにおける科学と知覚』（なる学士（学位）論文）中に、彼らはただの一度も、「もう一つの真理の探求」や「独自の理性」という各語句を用いてはいないことを、さらに認識論のみを言及するのではないことを断っておかねばならない。これらをはじめとする、鉤括弧使用の語句はもとより、筆者の私的用語である。筆者が私的用語を多用するせいで、私的用語は、彼らの諸作品の重視されるべき内容や用語を的確に表現させているかの、わけてもデカルト認識論にどれほど接近できているかの指標に果たしてなり得るかと問いかげさすにちがいない。しかし私的用語が彼らにではなく、筆者一人に帰する語句であるといえども、私的用語の使用なしに、筆者が、たとえば上記で鉤括弧を付している「もう一つの真理の探求」たるその認識論を、これも鉤括弧の「独自の理性」で展開されよう認識論として、他の用法との、またこの各認識論の中心なる理性との区別を試みることは、かつ「独自の理性」による認識論が彼にとっては真のねらいになると、彼女にとっては学士論文を支えると思通することは不可能であったのである。

筆者がデカルト認識論を質すに、なぜシモーヌ・ヴェーユなのかという、筆者にあっての両者の関係について、また彼女の学士論文の題名にもかかわらず、

なぜ認識論として学士論文をみるのかなどについては、次回で明かすことにするが、一方この機会に、デカルトに関心ある方々やカルテジアン（デカルト信奉者）の方々が彼女の『デカルトにおける科学と知覚』を一読されるならば、筆者のこの拙論での見方に対する批判は当然としても、学士論文に述べられる認識論は、筆者への批判を越えて（筆者への批判など無視して）、おそらくデカルトの再考か見直しかの契機に供し得るのではなからうかと思われるのである。筆者の方では依然として、彼女によって、デカルトのいかなる認識論も〈不明瞭、難点、矛盾〉であると語られたのだから、これらの指摘が当を得ているのは、筆者に残された「もう一つの真理の探求」の認識論のいずこにおいてなのかを、そもそもかかる認識論が本当に存するのかを筆者なりに取り上げ、確かめることを続けてみるしかなくなるわけである。

〔続〕

以下の註の番号が(58)から続くのは、本稿が前号『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅱ〕』の脱稿と同時に書かれていたものであるからである。

註

- (58) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』参照，新潟大学人文学部人文科学研究，第110輯，2002年12月。
- (59) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅱ〕』参照，新潟大学人文学部人文科学研究，第111輯，2003年3月。なお〈日常的用法〉自体の詳細については，同上紀要〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕〔Ⅳ〕〔Ⅴ〕（また次回予定の〔Ⅵ〕）を参照。
- (60) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』引用文①P.18参照，新潟大学人文学部人文科学研究，第110輯，2002年12月。
- (61) Simone WEIL 《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》P.47, Gallimard.
- (62) 〈日常的用法〉はそのなかで「認識の起こり」としての身体的能力を，かつ身体的能力が脳に伝わり，その〈腺〉にて〈精神（âme）〉としての，本文の「別の能力」を生じさせる。

〈真理の探求〉はそのなかで〈精神（esprit）〉を代表する理性だけで，身体的能力と関係せずに，「認識の起こり」と生成をまかなう。それが本文の「別の能力」という表現になる。

「もう一つの真理の探求」はそのなかで〈精神 (esprit)〉の能力の働きが身体
の能力と関与して、本文の「別の能力」を生み出す。この (esprit) の能力を、
筆者はデカルト独自の理性と捉える (のちの本文参照)。

- (63) いくつかの検証と証明は、〈真理の探求〉にあつては、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』を、〈日常的用法〉にあつては、同〔補Ⅱ〕を参照。
- (64) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕』P.P.1-2参照、新潟大学人文学部人文科学研究、第108輯、2002年3月。
- (65) 同上P.1参照 (たとえば〈âme〉としての諸能力をデカルトの作品中でどこに見出せるか。この引用文⑰や⑱の諸能力を〈âme〉のそれに当てはめず、筆者が検証したかぎり、これを除いてどこにも見当たらない。だからその点〈不明瞭、難点〉となる。また引用文⑰や⑱の諸能力は〈esprit〉のそれとなつて、〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」(の各認識論)にも用いられてよいことになる。要は各引用文が三つの用法における各能力になることを示唆させる)。
- (66) 同上註(64)参照 (⑱には〈esprit〉の表示があるから、少なからず⑲は〈真理の探求〉の諸能力として捉えられる)。
- (67) 詳しくは、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』引用文◎P.P.17-18もしくはP.P.35-38参照。
- (68) 紀要『デカルトにおける理性と感覚(3)』P.59参照、新潟大学人文学部人文科学研究、第99輯、1999年3月。
- (69) Simone de BEAUVOIR 《Mémoires d'une jeune fille rangée》Gallimard(folio) 参照。
- (70) Deni HUISMAN 《Dictionnaire des philosophes》P.409, P.U.F 参照 (なお註(69)に Brunschvicg の名は、第三部のP.318, P.324, P.369, 第四部のP.427, P.434に記される。)
- (71) 本文註(65)ならびにその註欄参照。
- (72) 次回以降の紀要で〈trou〉と〈pore〉の相違を明らかにするつもりである。
- (73) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅱ〕』P.2参照。
- (74) 同上P.19参照。
- (75) 同上P.P.13-14ならびに註(31)や註(57)の各註欄参照。
- (76) René DESCARTES《OBJECTIONS ET RÉPONSES (PREMIÈRES RÉPONSES)》P.347, Gallimard.
- (77) René DESCARTES《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》P.569, Gallimard.

- (78) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅱ〕』参照。
- (79) 『プラトン全集』1(バイドン) P.176, 村治能就訳, 角川書店, 参照。
- (80) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅱ〕』参照。とくに〈実践的理性〉については, 引用文①P.8以下参照。
- (81) 同上引用文①P.4参照。
- (82) 同上引用文②P.5参照。
- (83) 紀要『デカルトにおける理性と感覚(1)(2)(3)(4)』(1)P.60, (2)P.62-63, (3)P.51, P.54-56, (4)P.98参照。
- (84) René DESCARTES 《DISCOURS DE LA MÉTHODE》 P.137-138, Gallimard.
- (85) 本文註(64)以降を参照。
- (86) Simone WEIL 《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》 P.96, Gallimard. またデカルト本人の言では次のように語られる。すなわち 〈J'avais un peu étudié, étant plus jeune, entre les parties de la philosophie, à la logique, et, entre les mathématiques, à l'analyse des géomètres et à l'algèbre.... (わたしは若かった頃, 哲学の諸部門では, 論理学を, 数学の諸部門では, 幾何学者の解析と代数を少し学んでいた)〉 (《DISCOURS DE LA MÉTHODE》 P.136)
- (87) Simone WEIL 《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》 P.97, Gallimard.
- (88) René DESCARTES 《DISCOURS DE LA MÉTHODE》 P.130, Gallimard.
- (89) Ibid; P.137.
- (90) René DESCARTES 《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE~Lettre de l'auteur à celui qui a traduit le livre Laquelle peut ici servir de préface~》 P.569.
- (91) Ibid; P.565.
- (92) Ibid; P.570.